

“英語の美” —— 内村の英語観

なぜ内村たちは“心中の情緒や思想を最もよく言い現わすには英語に限る”とまで思っていたのであろうか。なぜ内村は生涯にわたって、あれほどに英語でものを書いたのであろうか。長期間の学習と滞米生活とによって、英語が自由に使えたということもあるだろう。日本を世界に紹介するのに、英語は当然の媒体であったということもあるだろう。しかし内村が英語を愛用したのは、決してそれだけではなかった。彼には英語でなければ表現できない何ものかがあった。英語によらなければ伝達しえない何ものかが、彼の内にあったのである。

内村はその最初の英文著作の中で、こう告白している。

I learnt all that was noble, useful, and uplifting through the vehicle of the English language.

(私は高貴なもの、有益なもの、向上的なものを、すべて、英語という媒介物を通して学んだのである)。¹⁴

また“万朝報”英文欄主筆時代には、こうも書いている。

It may be too presumptuous for us to write in a language, which, we must confess, is but very imperfectly understood by us. But there are many things in modern thought that can be better expressed in English than in our own Japanese.

(私共が、不完全にしか理解できないと言わざるをえない言語で、ものを書くということは、あるいは傲慢のそしりをまぬかれないかも知れない。しかし近代思想の中には、私共じしんの日本語によるより、英語をもってする方が、よりよく表現しうる事柄がたくさんあるのである)。¹⁵

すなわち内村は、英語には“高貴で、有益で、向

上のなもの”がある、英語は“近代思想の中の多くの事柄”をよりよく表現しうる言語であると考えていた。この内村の英語観が、彼にあれほどに英語を愛用させたのである。

内村の隠れた名著に“外国語の研究”¹⁶という小冊子がある。これは外国語学習の意義と目的と実際とを、自分の体験に即して論じたものだが、そこで彼は自分がなぜ英語を愛するかを率直に語っている。

この論文は8章から成るが、その1章に“英語の美”というのがある(第4章)。内村によれば、英語は決して“美的言語”と言うことはできないが、英語には英語特有の美がある。それは“その発音においてあらずして、その意義においてあり”、“外貌に質素にして内裡に豊饒”なる点にこそ、英語の“深淵はかりがたきの美”があるというのである。そして彼は、sublime, imagination, inspiration, あるいはmind, spirit, soul(内村はこれを三姉妹語と呼ぶ)のような語を列挙し、適切な日本語の訳語が見つからない、こうした“深き宗教的理由のその中に存する”ことばの中に、実に英語の精神が宿っていると論じている。

Soul という語を説明した次の一例を読めば、人は内村の英語に対する傾倒のほどを知ることができるだろう。

……されどもソールそのものを言いあらわすの語の吾人にあるなし。これを靈魂と訳して、その内に明らかに^{パーソナリティ}個人格を発見するあたわず。魂にあらず、魄にあらず、精にあらず。神にあらず。ソールはソールにして、これを他の英語に訳すれば individual (= indivisible) すなわち分かたべからざるものなり。すなわち心霊界のアトムにして、これをこぼつ力あるなく、これを割くの利刀あるなし。すなわち吾人各個の自由の存するところにして、人類たるの特権の付着するところを言うなり。

英民族の自由観念は彼らのソールの定義より来りしものなり。彼らの称する個人主義なるものは、現今わが国において伝えらるるがごとき利己主義と称するものにあらずして、ソール主義を言うなり。A MAN。人一人、永久不滅のもの、他人の干渉しあたわざるわが心中の一物、すなわち自我そのもの、帝王にも宿りてまた乞食にも宿るもの、これソールなり。人の人たるの真価は彼の有するソールにあり。人命の貴重なるは、その内にソールなる霊物の宿ればなり。……¹⁷

内村は英語を愛したもう一つの理由は、それが“平民的言語”であるということにあった。この点は“第3章 平民的言語としての英語”において論じられている。

内村の言うところによれば、言語には貴族的なものと平民的なものがあるが、英語は“その本源において非常に平民的にして非常に平等的”な言語である。第一に英語は、その綴字法においても発音法においても、きわめて不規則で洗練されていない。第二に、英語には“敬礼的ならびに階級的言語”がはなはだ少ない。例えば人称代名詞にしても、一人称、二人称はそれぞれ I と you だけで、日本語のように相手によって呼称を変えることをしない。第三に、英語には“平民的言語”が多い。そしてここでも、彼は home, gentleman, lady, king, independence のような語を挙げて、英語が平民的言語であるゆえんを説き、次のように結論している。

英語を学んでその平民的思想に感染せざらんとするがごときは、ぶどう酒を飲んでその酒精を受けざらんとすると同一なり。¹⁸

英語の美点として彼の見出した“平民的思想”は、内村の“Love of Common Things”と、“The Commonest and the Best”という二篇のエッセイ¹⁸に美しくこだましている。前者の一節を紹介しよう。

I like common things.

I like the air, the water, and the earth.

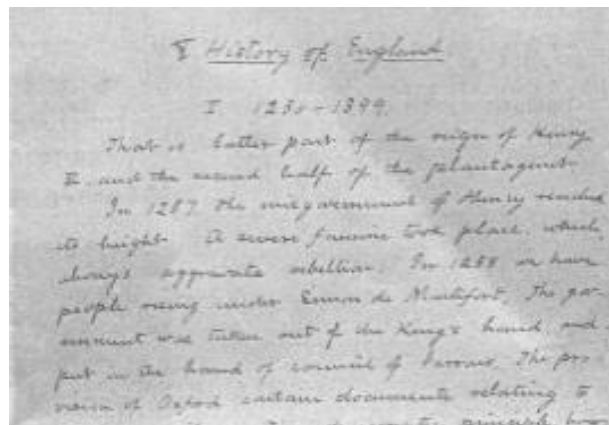
I like common men, laymen, labourers,

and household wives.

I do not like geniuses, uncommon, extraordinary men and women.

I know Jesus was a common man, a carpenter, not an office-bearer, not a title-carrier, a plain Galilean, undistinguishable from other Galilean peasants by his outward looks and appendages.

(私はふつうのものを好む。私の好むものは空気であり、水であり、大地である。私はふつうの人を好む。私の好むものは平信徒であり、労働者であり、主婦である。私は天才を好まない。ふつうでない、特別な男女を好まない。私はイエスがふつうの人であられたことを知る。大工であって、地位も肩書きも持たない人。平凡なガリラヤの人。その外見と持ち物とからは他のガリラヤの農夫たちと全く区別できない。ふつうのガリラヤ人であられたことを知る。)



アマスト大学留学時代のノート

内村の言う“平民的思想”とは、自由と独立と平等の思想である。そしてその思想の根拠は、人が individual であるということである。そして人を真に個人たらしめるものは、人の内にある soul である。Soulこそ人にとって何よりも“高貴なもの”である。この人間にとって最も基本的で重大な思想を、英語は、他のどの言語にもまさって、よく提供、伝達しうるものである、と内村は考えていた。それが彼の英語観であり、そこに彼の英語に対する尊敬と愛とがあった。だからこそ内村

は、時にはあえて日本語によらずに、英語で自分の思想を表現し、自分の内にあふれるものを英語で語ったのである。

英語を愛した内村は、みずから確固たる individual であった。そしてどこまでも自由に、独立に、英語を駆使して、すべての人と平等に交歓しようと努めた国際人であった。

注

14 “How I Became a Christian” Ch. 6。 “英・1” P. 105。 訳は “信・2” P. 73。

15 “英・5” P. 239。 訳は筆者。

16 はじめ1899（明治32）年1月から4月まで “東京独立雑誌”（内村みずからが主筆となって発行した社会評論誌）に連載され、終るとすぐ5月に単行本として出版された。“信・5” に収録されている。

17 “信・5” P. 200f。 傍点は筆者。

18 “信・5” P. 196。

19 いずれも “Japan Christian Intelligencer” に載ったもの。“英・4” P. 40ff, 122ff。 引用は前者の一部。訳は筆者。

（所載）「YMCA English Quarterly」No.14

1982年 日本 YMCA 同盟